高等学校美術授業における
形成的評価の方法についての一考察
～チームティーチング時の教員間での目標設定及び評価規準のプロセスを通して～

学籍番号　229338
氏　名　中野真希
主指導教員　渡邉美香
副指導教員　佐藤賢司

1. 研究の背景及び目的

筆者は令和 4 年 6 月から翌年 12 月まで高等学校で実習活動を行った。実習校は美術を専門的に学ぶ高校で、美術教員が複数名在籍し、複数の教師や一つの授業を受け持つという特殊性を持つ。美術教員が複数名いることで指導内容や評価について討議することができる。一方で一般の普通科高校では美術教師は一人で授業を受け持ち、授業改善や評価活動を行わなければならない。その場合、必ずしも議論できる同僚がいるわけではない。実習校での観察を重ねることによって柔軟な視点を養う。生徒の進度を確認しつつ目標へ導く指導において、必要となる観察力を私自身の課題として設定し、実践課題研究のテーマとした。

約 2 年間の実習活動を通して、主に「平面造形」の授業を観察した。この授業では、第 1 学年 200 名を対象に 5 名の教師が 1 クラス 20 名、2 クラスずつを通年で担当する。つまり、チームティーチングを通して、教師が指導内容を共有し、評価について検討を重ねている。一般教科のように考査を実施する教科であれば、考査問題や配点の統一化でなんとかなる。しかし、美術の授業は実技があるため、複数の教師が授業を担当し評価をする場合、評価規準を共有した上で、観点ごと作品ごとに統一した評価活動を行うことになる。また、生徒自身のイメージする到達点と授業のゴールが異なる場合、それを軌道修正するために、教師からの適切な声掛けや指導が必要になる。実習校の教師は生徒が制作に悩んでいる場合、まずは抱える悩みを聞き出してから、生徒の応えに対して提案する。机間指導の中で、このような対話が教師と生徒の間で頻繁に起きている。しかしながら、授業内での活動の様子だけでは、生徒が作品に対して実際にどのようなゴールをイメージしているのかは見えにくいというのが現状である。その際に役立てられるのがワークシートである。実習校では 3 つの評価観点のうち、「主体的に学習に取り組む態度」について、適切な評価活動を行うための手立てとして、「平面造形日誌（ワークブック）」が導入された。

これらの背景から、本研究では、教師が適切な形成的評価ができるようになるための評価方法を検討することを目的として、主体性や課題に向き合う力の評価理解を深める。

2. 研究の方法

本研究では、主体性や課題に向き合う力の形成的評価理解を深める方法として、ワークシートを通した生徒と教師の関わりの観察・考察を行う。また、美術の実技科目を対象に複数の教師で如何に評価の共有化を行うのか、観察をもとにそのプロセスを整理する。ワークシートについては、令和４年度「平面造形」の油彩の単元で導入されたワークシートの生徒の回答及び、教師のフィードバックの読み取りを行う。また、大学生を対象にワークシートを取り入れた授業を実施することで、ワークシート作成における成果と課題を明らかにする。

3. 考察結果

「平面造形」の油彩の授業では、生徒の黙々と制作する様子を観察し、筆者は生徒が「集中している」と判断した。だが、実際は生徒の多くが初めての画材を扱う緊張感や不安を抱えており、教師からのフィードバックを必要としていた。生徒が毎回の活動をワークシートで振り返ることが、筆者が彼らの考えを授業後に知るきっかけとなった。ワークブックの分析から教師は生徒一人ひとりに寄り添ったフィードバックを行っており、制作に不安を抱えている生徒には、自信を持って進められるようアドバイスしていた。また、制作ペースの遅れた生徒に対しては、制作スピードを上げるよう軌道修正を行っていた。このことから、生徒の振り返りに対する教師のフィードバックが生徒のつまずきの発見に繋がっていることが明らかになった。ワークシートの毎回の振り返りと教師によるフィードバックが、生徒の課題に向き合う姿勢を育むきっかけになっていることが明らかになった。

大学生を対象としたワークシートをとり入れた授業では、ワークシートが学生の進捗状況の把握に役立てられ、学生の課題に向き合う力を養う結果となった。特に、パワーポイントのフォーマット及び、データでの課題の提出形式は、編集や管理の観点から成果が大きかった。このことから実習校のチームティーチングにおける、ワークシートの形成的評価での応用にも期待できる。

4. 今後の課題

実習校では令和４年度「平面造形」で使用したワークシートの課題として「制作に充てられる時間が短くなること」「ワークシートを紛失する可能性」「生徒が提出するワークシートの完成度の差」があり、令和５年度の授業では改良版が導入された。これについては、上記の課題が解決されたかについて検証を行っていない。検証する事も今後の課題の一つであるが、ワークシートの改善を進めていくことの重要性を理解した。

今後の課題として、ワークシートにおける振り返りの活動を、授業者と生徒との双方向な授業の実現に繋げたいと考えている。本研究では、ワークシートが生徒の課題に向き合う力を育むという成果が見られたが、ワークシートに対する「評価するもの、評価されるもの」という認識が、一方通行な授業を生み出さないために、教師による形成的評価が重要になってくることが分かった。実習校では、制作に対して熱心に取り組む生徒が多いが、一般の普通科高校では、必ずしも美術に関心のある生徒ばかりではないため、生徒と対話し真摯に向き合うための材料として、ワークシートを充実させていきたい。